
スポーツ科学系科目における正課外教育の可能性と評価 - 身体活動状況と健康への関心を高める方策を考える -

研究代表者 河合 美香 (法学部准教授)
 共同研究者 橋本 雅子 (短期大学部教授)
 新野 守 (非常勤講師)
 金 尚憲 (非常勤講師)
 小山 きくこ (非常勤講師)

はじめに

近年、学生の心身の不健康な状態、またスマートフォンの普及等により、直接人と接する機会の減少により、コミュニケーション能力の低下が懸念されていることから、全国的に「スポーツ・健康分野」の責務が再認識され、この分野における身体的、精神的、社会的効果が期待されるようになってきている（全国大学体育連合：21世紀の高等教育と保健体育・スポーツ）。また、「スポーツ」の捉え方が従来 of 身体運動による「する」に加え、「みる」、「支える」も含めて広義になっていることから、学生が「スポーツ」に関わる機会や可能性も多様化し、拡大しつつある。

一方、本学の教養教育「スポーツ科学系」は、『現代社会における人々の健康状況や余暇状況をふまえ、スポーツについての理解とその合理的な実践方法について学ぶこと』を教育理念として掲げ、専門に関する「講義」と身体運動を伴う「演習科目」を展開しているが（いずれも教員免許取得に必要な「体育」の選択必修科目）、他の人文・社会・自然系分野と比較して開講数が少なく（2018年度：「講義」6科目：開講 11、「演習」1科目：開講 44）、専任教員の担当比率が低い現状（深草：2.2±1.6コマ）にある。したがって、学生の心身の健康の諸問題の改善、またスポーツとの関わりの高揚には課題が多くあると考えられる。

これらの現状を踏まえ、現在の正課の授業科目のみでは限界がある「スポーツ・健康分野」において、正課外教育が学生のスポーツの実践への誘い、および健康への興味・関心の喚起を促すか否かを検討することを目的として、2016年度～2017年度に学内各組織と地域や行政、およびNPO組織等と連携してスポーツ・健康関連の各種活動への参画を試みた（2016年度、および2017年度「教養教育FD研究開発プロジェクト報告」参照）。この取り組みは、文部科学省による、「近年の個性化し、多様化する学生に対し、従来の『教員中心の教育』から『学生中心の教育』の必要性が指摘されるようになって以降、学生が社会との接点を持つ機会をもち、また学生の自主的な活動等を支援することにより、複雑化し、価値観が多様化した社会に対応するための基本的な能力の涵養に努めることが求められるようになってきている（大学における学生生活の充実方策について（報告）：2000年）」にも対応した試みであった。

その結果、「スポーツ・健康」に関する活動の企画や参画、専門家との情報交換等の機会の提供、および創生は、学生の「スポーツ・健康」への興味関心を高め、身体活動状況を良好にする効果を期待できることが示唆された。

I. 本プロジェクトの目的

本プロジェクトでは、正課授業の内容と展開を検討することに加え、引き続き正課外教育として、学生に「スポーツ・健康」に関連するイベントや教室等への参画、サポートなどの活動に関わり、考える機会を提供すること、また、学生が正課外の活動に参画した場

合の正課授業の評価について、評価の在り方、および評価方法を検討することを目的とした。

II. 方法

以下の2点から検討した。

1. 正課外の「スポーツ・健康」に関するイベント・および研究会等の学生の参画

正課授業において、正課外のスポーツ・健康に関するイベント・および研究会を紹介し、それぞれに参加した学生の希望者にレポートの提出を求め、この場合、該当する授業における成績評価への加点を試みた。なお、この試みについては、該当する授業科目の履修学生に第一週目の授業時を含めて複数回にわたって説明し、共有した。

2. 正課外の活動への評価に関する調査

本FDプロジェクトの該当学生を対象に正課外授業における「スポーツ・健康」に関するイベント・および研究会等への参画状況、正課外の活動に参画した場合の評価について、また、今後の正課外教育の展開への期待と課題について調査を実施した。

III. 正課外の「スポーツ・健康」に関するイベント・および研究会等の参画

正課外の活動として、「スポーツ・健康」に関するイベント・および研究会等を該当する授業にて履修学生に紹介し、参画を促した。

1. キッズスポーツキャンプへの参画

2017年度に続き、本学RECの協力の下、株式会社RIGHTs.とSGホールディングスを中心とした「SGホールディングス キッズスポーツキャンプ実行委員会」の主催による、小学生対象の「キッズスポーツキャンプ」が開催された。

「キッズスポーツキャンプ」は、有森裕子さん（バロセロナ、アトランタ五輪女子マラソンメダリスト）が「スポーツを通じて子どもたちに夢や希望を持ってもらおう」と企画。スポーツで実績をもつ著名な講師が小学生を対象に展開され、行政（京都府と京都市、また滋賀県、守山市等、以上の行政が管轄する各教育委員会）も後援する「産学官民」の取り組みでもある。また、本キャンプは、各教育委員会が後援していることから、イベント開催に先立ち、管轄する各小学校において参加者募集の案内が配布された。

今年のキッズスポーツキャンプは、8月4日（土）に本学「専精館」を会場として、小学校1～6年生とその保護者60組を対象に「in 京都 1day」、その後の6日（月）～9日（木）の3泊4日は、守山市の「守山パーク（SGホールディングズの保養施設）」で実施された。

本年は昨年の反省から、キャンプの日程を本学の定期試験週間と重ならないように配慮、調整し、学生には2017年度のキャンプの様子をまとめたダイジェストDVD等にて紹介してキャンプへの参画を促した（ダイジェストDVD：<https://www.sgh-kidscamp.com/>）。

（1）「in 京都 1day」

8月4日（土）の「in 京都 1day」では、学生が親子を迎え、21号館の教室にてMC MORIYAのオープニング後、親子参加での「いのちの教室」で飯沼誠司氏（ライフセーバー）から救急救命の必要性、方法の説明を聞き、また体験していのちの大切さを学んだ。その後、学生の誘導で専精館に移動し、有森裕子さんによる「せんたくテニス」、「はこぼーる」等の『ゆるスポーツ』を体験した。この間、筆者は保護者対象に「食育セミナー」を務めた。

続いて赤星憲広氏（元プロ野球選手）の「キャッチボール教室」といとうまゆさん（NHK教育『おかあさんといっしょ』の4代目たいそうのおねえさん）の「ダンス教室」が展

開された。講師の指導の下、子どもたちはもちろん、日頃運動不足のお父さん、お母さんもと一緒に学生も賑やかに、そして楽しく汗を流した。

参加者の誘導、また各プログラムの補助としての講師のサポートは、初めこそ戸惑いがありながら子供たちや親子への声掛け、励まし、また講師の指名によるデモンストレーションを経験した。

※ゆるスポーツ：年齢・性別・運動神経に関わらず、誰もが楽しめる新スポーツ。超高齢化社会でスポーツ弱者が多い日本だからこそ生み出せるみんなのスポーツ。勝ったらうれしい、負けても楽しい、多様な楽しみ方が用意されているスポーツ。足が遅くてもいい、背が低くてもいい、障がいがあっても大丈夫。あなたのスポーツが、必ず見つかります（『ゆるスポーツ』公式HPより）。

「野球教室」と同時進行で進んだ「ダンス教室」をサポートした学生は、講師のいとうまゆさんのアシスタントを務め、「幼い頃にテレビで観ていたダンスのお姉さんのアシスタントができるなんて！」と感激していた。赤星さんの熱血「野球教室」をサポートした学生は、直々に元プロ選手の指導法を学んだ。また誘導や受付等を担う中で、有森さんから「学生時代にやっておくこと」について、話を聞く貴重な機会があった。



赤星憲広氏の「キャッチボール教室」



いとうまゆさんの「ダンス教室」

(2) 「in 滋賀」のキャンプ

「in 京都 1day」に続き、8月6日（月）～9日（木）の3泊4日、滋賀県守山市の「守山パーク」で「in 滋賀」のキャンプが開催された。

学生は子どもたちと講師、またスタッフと寝食をともにしながら、地元の滋賀レイクスターズの「バスケットボール教室」、大山加奈さん（女子バレーボール元全日本代表）の「バレーボール教室」の他、京都サンガF.C.の「サッカー教室」やダンス教室など、連日の多彩なスポーツプログラムと夜の「振り返りの時間」、また寝食をサポートした。

最終日の有森裕子さんの「陸上教室」では、学生も子どもたちや講師とともに総動員でリレーを走り、時に戸惑いながらも笑いと興奮満載大盛り上がり、大騒ぎの中、閉講式を経てプログラムを終了した。

本キャンプには、複数の学生が全日程参画し、他大学の学生とともに学生スタッフとして、子どもたちの良きお兄さんお姉さんになり、7～8人の子どもたちをまとめるグループサポーター（GS）、グループの専任サポートやグループの各活動を採点するマルチサポーター（MS）、また、キャンプの運営を担い、各教室やイベント事の演出、準備をするディレクター（D）として、それぞれキャンプに関わる中で、講師の指導法や子どもたちへの言葉かけ、各プログラムの準備や本企画の運営等を体験した。



有森裕子さんによる「陸上競技教室」



レイクスターズの「バスケット教室」



食事前の様子



保護者対象の「食育セミナー」



学生スタッフと一日の振り返りの時間



大山加奈さんの「バレーボール教室」

なお、昨年、本キャンプに参加した学生は、子どもたちとの関わりへの興味関心を高め、卒業後、小学校の教員免許取得を目指して他大学に進学している。

○学生のレポート（抜粋）

- ・このようなキャンプには初めて参加したのですが、スタッフの皆さんからも子どもたちからも学ぶことがたくさんあった5日間でした。子どもたちと出会った1日目は、私自身もグループサポーターとしてやっていけるか不安でしたが、最終日にはグループの子どもたちからメッセージボードをもらい、お別れの時に泣いてくれる子も何人かいて、その時諦めずに子どもたちに接して良かったと思いました。
- ・キッズスポーツキャンプに参加した今後の課題としては、もっともっと積極的に人と関わっていかねばならないと感じました。
- ・子どもたちが挑戦する姿を見て、私もかなり感化されました。苦手なことを避けたり、自分の都合に合わせて人と関わったりすることは良いことではないと改めて感じました。実際、私自身キャンプから帰宅してから普段なら怠けてしまうことに取り組むようになり、また、両親とも積極的に話をするようになりました。
- ・キャンプが始まる前に想像していた以上に大変だったけど、子供たちと過ごすことはとても楽しかったです。
- ・体力や食事では子供たちそれぞれに違いがあり、運動が苦手な子や野菜が嫌いな子もおりその子供たちに対する言葉のかけ方にはすごく気を遣う必要があります、このキャンプのテーマのなんでも挑戦するという大切さを知ってもらうことを心掛けました。
- ・講師の方は、一方的に子供たちに指示を出したり教えたりするのではなく、易しい言葉で子供たちの反応を確認したり、時にはジョークを交えたりと、飽きさせないように工夫して進行していた。今後のプレゼンや発表の際の活かせるようなことばかりですごく勉強になりました。

本企画への参画の課題

本イベントへの参画と成果について授業にて履修学生に紹介したこともあり、学生スタッフ募集の周知は昨年よりも改善したが、学内施設の利用、また実施期間は引き続き学内の該当組織とともに検討が必要である。

一方、近年、大学の社会的貢献（USR:University Social Responsibility）が期待されることから、本イベントは、産官学民の取り組みとして、後援となった京都府と京都市、滋賀県、守山市の各教育員会を通じて各小学校に案内が配布され、イベントも学外から評価された（毎日新聞、京都新聞に掲載）。

今後、本イベントへの開催時期、および参画について、近隣大学の関係教員とも情報交換しながら、多角的な検討を試みる予定である。

2. 森川貞夫氏（市民スポーツ&文化研究所）を招聘した研究会

10月31日（水）、森川貞夫氏に「15年戦争と国民の『体力』～戦前の国民体力（管理）法制定過程に見る国民の『体位・体力』問題の本質～」と題して講演いただき、参加と意見交換した。同日の1限「人間とスポーツ」の授業の中での『スポーツと人権・平和』をテーマとした特別講義に続く研究会であった。

研究会には7人の学生が参加し、学内外から参加していた法学、福祉、スポーツ、文学等、多様な分野を専門とする教員の他、弁護士、スポーツイベント実行員等、異分野の専門家とともに多角的な視点から意見交換した。この意見交換は、近年、スポーツ界にて明るみになっているいじめや暴力、ハラスメントの背景について考え、理解する一翼を担っ

た。また、学生の率直な意見や感想は、参加者のそれぞれの立場から大学でのスポーツのあり方、価値などを考える上でも貴重なものとなった。

○学生のレポート（抜粋）

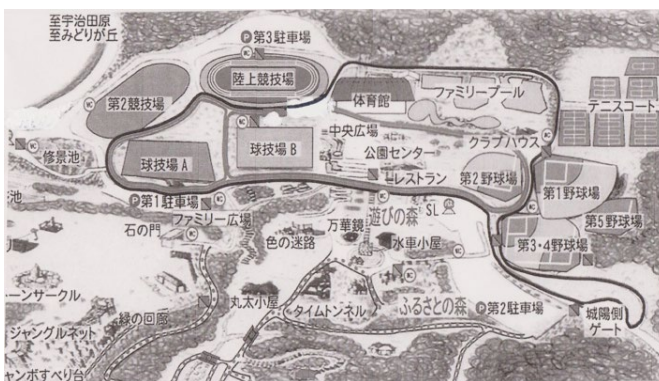
- ・体力を歴史的に見ることで今のスポーツのあり方が見えてくることに驚いた。パウハラの問題などスポーツのあり方が問われている今、スポーツを歴史から考え、スポーツの問題について考えていく必要がある。
- ・昔は体力は国のため、天皇のためにつけていたのが、今は自分のためになっていることを嬉しく思う反面、実際、本当に自分のためにスポーツをしている人ばかりなのか疑問に感じた。
- ・森川先生の発表において焦点となった大正から昭和前期（終戦まで）の日本は、「大正デモクラシー」とも称されるいわば民主主義の幕開けとなった一方、軍国主義・国家主義の強化が図られ、とりわけ教育面（例えば「教育勅語」）に現れるが、まさかスポーツの面でも反映されているとは思わなかった。
- ・民主主義そのものが崩壊されているように感じる今日この頃、スポーツにおいて国家・政府による干渉があってはならず、何も影響がないことを祈るばかりです。

3. ジョグフェスタへの参画

11月25日（土）に京都ランニング連合が主催する運営する「ジョグフェスタ」（於：京都府立山城総合運動公園（太陽が丘総合運動公園）への参画、また、この企画の課題等を客観的に考える機会の創出を目的とした。

ジョグフェスタの目的は、「日ごろ身体活動する機会がない人に気軽かつたのしくその機会を提供すること」であり、スポーツ店や鍼灸院など、様々な立場からの協力を得たイベントであった。学生の参画は、参加はもちろん、スポンサーとの交流、イベント会場や運営の視察のみでも構わないと案内したが、参画したすべての学生が10 km～20 kmのレースに参加した。

また、大会の運営側としてのタイムスケジュール及び運営要項を得て、参加する立場とは異なる視点からイベントに参画した。



公園内のレースコース



レース後の集合写真

○学生のレポート（抜粋）

- ・年齢層関係なくいろいろな方々がジョギングに参加されていて驚きました。同じ区間では80歳くらいの方も走っておられて、「元気って素晴らしいな」と感じました。

- ・最後のゴールのところで一緒に手をつないでフィニッシュした時は、爽快感とやり切ったという達成感でとても感動しました。
- ・このイベントには様々なサービスがあるし、人数が集まるともっと賑やかで活発なイベントになると思うので、そのためにも積極的な声掛けやビラ配りなどの宣伝をしていく必要があるように思います。
- ・ジョギングは苦手だけど、「ジョグフェスタ」に参加するために頑張ってみようと思えるようになった。
- ・初めて参加した人にとっては、どこに集合すればいいのか、どこに荷物を置けばいいのか、走り終わった後にどう動くのかなど、わかりにくいと感じた。
- ・このイベントを多くの人に知ってもらうために、今はインターネットが普及し、宣伝にはこの上なく便利な時代なので、インスタグラムやツイッターで呼びかければ若年層は知ることができるし、高齢者にはチラシを配ったりするのが有効だと考える。

4. 太極柔力球の講習会の視察、参画

12月6日（木）に本学 REC (Ryukoku Extension Center) の「くらしと健康コース」で展開されている地域向けの REC コミュニティーカレッジ「太極柔力球※で優雅に健康づくり！- 太極拳を応用した優雅な動きで全身の筋肉をほぐし、身体を引き締めましょう-」を視察、体験の機会を設けた。

講座の参加者は高齢者が中心であったが、ラケットとボールを器用に扱い、全身の筋肉を刺激している様子を見学した。後半、講座の講師の配慮により、学生は参加者とともに本スポーツを体験した。はじめはラケットとボールの扱いに悪戦苦闘したが、参加者からアドバイスを受けたり、励まされたりしながら一緒に身体を動かした。

※ニュースポーツの一つとして展開されている「太極柔力球」は、中国悠久の歴史と文化から発祥し、太極拳と球技を融和させた太極的な運動（ラセンと円状）で、砂の入ったボールをラケットで操りながら、ゆったりと行う全身の円運動が特徴である。音楽をかけ、美しさと難度を追究する「演舞」と、ネットを挟んで螺旋（らせん）を描いた返球によって得点を競い合う「競技」が可能であり、誰でも自分の志向に合わせて気軽に、楽しく取り組める新感覚の運動である（2018REC 講座案内より）。



「太極柔力球教室」への参加の様子

○学生のレポート（抜粋）

- ・高齢者の方が、ラケットを上手く使って運動していることに驚いた。実際にやってみると難しかったが、参加者に親切に教えてもらえてありがたかったです。
- ・先生の動きはとてもやわらかくて、ゆったりしていたけど、演技のあとに息がすごくはずんでいたので、激しい運動になっているのだな、と驚きました。
- ・力づくの運動ではないので、男女関係なく、また若い人も高齢者も関係なく一緒にできるようなので、健康のためにはいい運動だと思います。
- ・簡単そうに見えたのに実際は、ボールを落としてばかりで、難しかった。高齢の方々が簡単にやっているの自分にも簡単にできると思った。
- ・姿勢がいい人の年齢が80歳代と聞いてびっくりした。やはり運動は健康にいいということがよくわかった。
- ・音楽に合わせた運動は難しかった。自分は体力はあるが、体力とは違う別の能力が必要だった。
- ・健康にはいい運動だと思うが、ラケットの動かし方がムズいし、あまり興味関心はなかった。
- ・地域の方々との交流ができてよかった。両親や祖父母にも紹介したいと思う。

5. 「共生シンポジウム」への参画

ボランティア・NPOセンターの障がい者、またLGBT等の多様性について考える「共生シンポジウム」への参加を正課外教育の一つとして位置づけ、本シンポジウムを企画した学生から直接、履修学生に対し、シンポジウムへの参画への呼びかけをしてもらった。

参加した学生は、本学が障がい者やLGBT等について考えるシンポジウム等の企画、開催等や環境整備を推進していることを知り、また、学生自身が多様性について、考える機会となった。

なお、筆者自身もスポーツ・健康の分野においても、障がい者、またLGBTに対し、今後、「スポーツ・健康」関連の授業の内容、また環境や制度の整備を考えていく必要があることを改めて認識した。

○学生のレポート（抜粋）

- ・学生が主体となってイベントを開催していることは本当に素晴らしいと感じました。また、それをサポートしていただいている学内外の方の支援体制は素晴らしいと思いました。彼らが生きやすい社会を私も一緒に考えていきたいと感じました。
- ・もっとこのような話を聞く場に学生が参加するべきだと感じました。私も授業で加点していただける機会がなければ参加していなかったと思いますが、なんのために大学に来ているのか考える機会となりました。
- ・学ぶ場を提供されていてもすべて自己責任である大学では、主体的に行動しない限り、有益な情報は得られないと思います。
- ・初めて入澤学長の話聞いた。力強くはっきり、それでいて優しい理想的な話し方だった。レジュメも最低限の情報だったので見やすかった。
- ・〇〇さんの話で、受検する時にバリアフリーのある大学を探していたと言っていたが、私は大学をそんな目でみていなかったし、龍谷大学をそんな目で見たことがなかった。創造力の乏しさ所以だということを反省した。

Ⅳ. FD プロジェクトの取り組みに関する調査研究

該当する授業で紹介した正課外活動に関し、2018年度該当授業の最終週に調査を実施し、379名から回答を得た。調査の対象とした正課外の活動は、以下の6つである。

- ・キッズスポーツキャンプへの参画
- ・太極柔力球講習会の視察・参加
- ・森川貞夫先生の研究会の参加（授業参加）
- ・「ジョグフェスタ」への参加、視察
- ・「共生のキャンパスづくり、シンポジウム in 深草」への参加
- ・食育交流会～「いただきます」への参加

1. 正課外活動への参画の状況

調査の結果を図1に示した。

「興味関心のあるイベントがあり、参加したかったが日程が合わなかった」の人数(割合)が高かった。次いで「興味関心のあるイベントがあったが参加したいとは思わなかった」の人数(割合)が高かった。

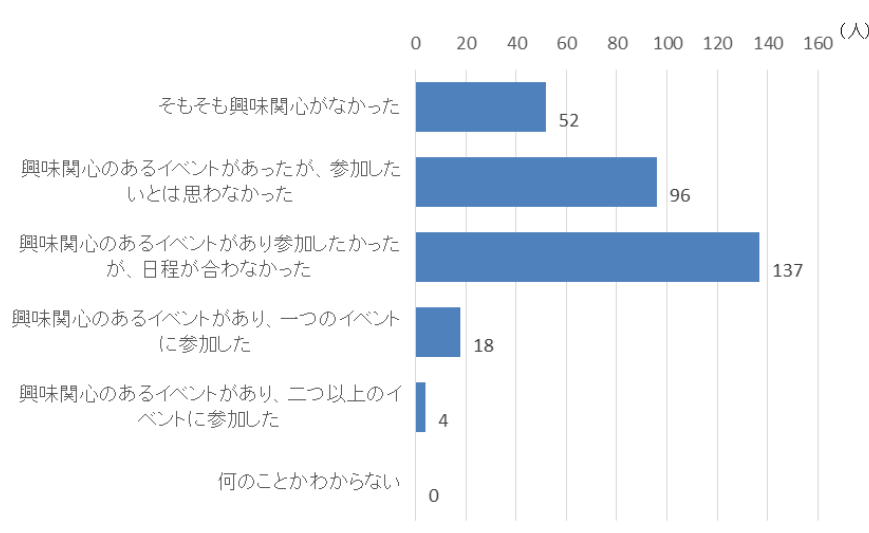


図1 正課外活動への参画の状況

2. 正課外の活動について

正課外の活動について、活動の内容、授業での紹介、日程、場所、評価方法など、自由記述とした（下記は原文）。

○正課外の活動を「オプション設定」について

- ・オプションというのは面白い設定だなと思った。
- ・授業外で様々なオプションイベントがあったので積極的に学生が参加していくことができるため良い機会だと思った。
- ・オプションイベントは授業以外でも良い関係が詰まる機会だと思うのであってよかったと思う。行けてはいませんが。
- ・自分は国際的なイベントがあれば行きたかったが無かったため行かなかった。
- ・オプションの題材に興味を惹かれるものはありませんでした。
- ・興味のあるイベントはあったが、大学外となると躊躇してしまう。
- ・全然知らなかったイベントなどを知れて、よかったと思います。
- ・もっとオプションイベントの種類を増やしていただければ行けたと思う。
- ・自分は参加することがなかったが、授業外でより、学びを深める機会が出来ることは良

いことだと思う。また、授業ではできないような実践的なことも体験できたりするのでオプションイベントを実施することは素晴らしいことだと思う。

- ・オプションイベントに参加するのは、授業では学べないことを身をもって経験できるのすごく良いことだと思います。
- ・授業のなかでは学び切れない知識や違う分野についても学習できる機会なので、そういったオプション授業が存在することはとても有用であると感じた。
- ・健康とスポーツの理論的部分を学びたいのであって、こういったイベントには特に興味がない。
- ・参加しなかったが、気になるものは複数あった。
- ・意欲の高い人がより積極的に授業に関することを深く学べるという他の教養科目にはあまり無い、良い学習の選択肢だと思った。
- ・結局、どのイベントにも行けなかったが、興味のあるものがたくさんあって、授業で聞けていいと思った。
- ・土日はバイトだったり平日でも他団体の集まりがあったり、行けば良い刺激を受けられたのにと悔やむばかりです。
- ・オプションイベントはとてもいいものだと思う。けれど1人で授業を受けているので、1人で参加するのは少しハードルが高かった。
- ・実際に自分が体験することはできませんでしたが、そういうイベントがあるのかと知るきっかけになりました。
- ・興味あるものは少しあったがそこまで足を運ぶまでには行動に移せなかったため、好奇心をもつことが私には必要だと思った。
- ・個人的にはイベント内容で興味のあるものがあまりなかった。
- ・イベントに参加してみたいと興味を持てたので良かったです。他のイベントも見てみたいです。
- ・オプションイベントの紹介を聞いて、今のスポーツは、本気で競い合ったり、何か目標を持って行う人だけでなく、自分のペースでゆっくり楽しむ為や、健康の為に行う人も増えて来ているのだなと感じた。
- ・興味深いものがたくさんありました。ですが、参加できなくて残念でした。
- ・子どもと関わり、一緒に運動することができるイベントがあり、スポーツや運動が苦手な自分でも楽しんで運動することができるのではないかと思った。
- ・教員でない方の話は違った視点があると思うのでそのような機会あって良いと思う。
- ・私は体を動かすのが好きなのでジョグフェスタに参加しました。このような野外のイベントに参加したことが無かったのでワクワクしたような気持ちで参加しました。しんどかったけどとても楽しかったです。
- ・ジョグよりももう少し軽い球技のようなイベントの方が面白そうな気がした。
- ・これから先にこのようなイベントを見かけたら参加してみたいと思った。
- ・スポーツに関するイベントは面白そうだなと思った。1人で運動するよりも大人数でやった方が楽しさがあり、効率良く出来るのではないかと思った。
- ・オプションイベントを行う以前にもっと興味関心を持たせる努力が必要である。
- ・今後このような機会があれば、自身の健康を保つ一環として積極的に参加しようと考えてる。
- ・日程が合うものもあったので行ってみればよかったかなと思います。
- ・授業時間内にこういったイベント等の告知をしてもらえるのはありがたいです。
- ・もう少し多くこのような機会があれば参加できたと思う
- ・イベントの紹介は、自分の興味関心が広がってとても良いと思います。しかし、日程が合わなかったりするので、もう少し前もって伝えてもらった方がいいかと思いました。
- ・なかなか場所に出向く時間がなかったので、文献を読むなどの課題があれば取り組みやすいと感じました。
- ・とても楽しそうな内容だったのですが、部活などの兼ね合いでなかなか行く機会がありませんでした。今後このような機会があれば行ってみたいなと思います。
- ・あらゆるイベントに関して参加する機会があったが行けなかったのもので、自主的に学習し

ていこうと思う。

- ・興味はあるが、それに対してプライベートの時間を使って行こうとは思えなかった。
- ・このようなイベントに参加したいと思ったことがなく、興味を持ってませんでした。
- ・学生ならではの参加できるイベントであったのでまた機会があれば参加したい。

○各イベントについて

- ・子どもと関わり、一緒に運動することができるイベントがあり、スポーツや運動が苦手な自分でも楽しんで運動することができるのではないかと思った。
- ・参加してみてすごくいい経験になりました。もともと運動するのが好きなのですが、大学生になって、なかなか体を動かす機会が減り、もの寂しく感じていたので、楽しめました。これからもイベントに参加してみたいと感じました。
- ・大極柔力球を1年の時に参加してとても楽しかったので、今回も行きたかったです。食育交流会も、私が普段している部活の活動と似ていて、とても興味があります。
- ・「太極柔力球」という運動は初めて聞いたので興味があった。
- ・太極拳のイベントなど行ってみたいと思ったけれども、なかなか日が合えず、いけませんでした。でも、森川先生の話はとても新鮮で興味深かったです。
- ・食育交流会～「いただきます」の向こう側のイベントには一番参加したいと思っていたが参加できなかった。
- ・そもそも、「いただきます」という文化が日本の文化として特有だと私は考えるので、参加したかったです。
- ・特に食育交流会に参加したかったです。
- ・カレーを一から作るやつにすごい興味があったのですが、行けなくて残念です。
- ・参加はしなかったが、この授業を受けて栄養、食育に関して関心を持ったため、食育交流会には興味があった。
- ・ジョグフェスタと食育交流会に参加したかったです。
- ・ジョグフェスタのボランティアとして参加したかったが、日程が合わなかった。走る側とイベントを手伝う側とでは、そのイベントに参加する目線が違うと思うので、また機会があれば参加してみたいと思った。
- ・森川先生の研究会に参加したが、生徒と森川先生の交流だとおもっていたら、他の先生方もいらっしやり、勢いに圧倒されてしまった。
- ・森川先生の授業はとても自分のためになったと思う。この経験を次に繋げていきたい。

○日程について

- ・時間に余裕があったら参加してみたいイベントも沢山あった。
- ・楽しそうなイベントが多かったが、日程が合わず参加できず残念だった。
- ・普段はゼミとサークルで、土日はアルバイトが固定であったので、前もって日程と時間が分かっていたら、ぜひ参加したかったです。
- ・運動習慣を身に付ける一環として、マラソンのイベントに参加するつもりだったが日程が合わず個人的に行なった。また、別の教員による追加講義は授業が重なっていた。
- ・参加したいイベントがありましたが、なかなか他の科目との兼ね合いで行けませんでした。しかし、授業でイベントについての紹介をするだけでも、私たち学生の視野を広げられるので、これからは是非そういったお知らせをし続ける方が良いのではないかなと思います。
- ・授業内で宣伝されてから知ったオプションイベントだったが、今回は日程が合わず自分に興味があったオプションイベントに参加できなかった。時期が落ち着けば、自ら身近なオプションイベントを探し、是非周りの人を誘い参加したい。
- ・今回は日程が合わず参加することができなかったが、今後履修した授業でそのようなオプション授業があれば積極的に参加し、進んで理解を深めていきたいと思った。
- ・楽しそうなイベントが多かったが、日程が合わず参加できなかった。残念だったが、これから先にこのようなイベントを見かけたら参加してみたいと思った。

- ・日程や物理的な距離が原因で参加を遠慮しました。
- ・日程が合わずに参加できず、奈良県の地方からかよっている私からすれば人口の多い場所で催されているイベントは行くだけで大変なのでモチベーションが上がらない。
- ・参加すればよかったなと思いました。
- ・もっと事前に知らせてほしい。バイトのシフトが提出し終わってから日程発表された時が多かった。
- ・参加してないのでわからないが、参加する年齢層が高そうに参加しづらかった。
- ・日程があえば行っていたかもしれなかった。
- ・気になるものもあったが、予定が合わず、参加できなかった。このようなものはもっと増やしても良いと思う。
- ・万が一興味があったとしても、授業と被る可能性が高い。
- ・場所が遠かったり行きづらい
- ・部活や用事などで参加できなかった。友達も誘って参加したいイベントが多々ある中で時間が合わなかったのは残念だ。だからまた機会があったなら是非参加してみたい。

○評価について

- ・加点があるというのはいいと思った。
- ・加点される要素があることはいいことだが、その時間に授業がある人がいる加点要素は少し不公平だと感じた。
- ・プラスαの点になるので行きたかったが、日程的に行くことができなかった。

調査のまとめ

正課外の教育として、「スポーツ・健康」に関するイベント等に参画して身体活動を実践したり、サポートしたりすること、また、研究会やシンポジウムへの参加し、能動的に学修することにより、正課授業の「スポーツ・健康」に関する専門的な内容に加え、「スポーツ・健康」を多角的な視点から考え、多様なアプローチがあることを知り、学生の興味・関心を高める可能性あることが示唆された。すなわち、「スポーツ・健康」への理解には多角的な視点が必要であり、このことを理解する上で正課外の活動による教育は有効であると考えられる。

本研究の課題と今後の展開

本研究では、正課授業の内容を深めることを目的として、正課外の活動による正課授業の教育効果を検証するために、対象授業の履修学生を対象に6つのイベント・研究会等への参加を促した。

その結果、正課外の活動への参画の学生の動機が「オプションの内容」であったり「加点」であったりと多様であるが、いずれにしても結果的に、「スポーツ・健康」分野に対する意識の変化やモチベーションの高揚、また学内外の関連各組織やまた社会的問題に対する興味関心を高める契機となる場合もある。すなわち、正課外の活動への紹介や参画への誘い、学生の参画は、4 正課授業の内容の理解を深めることに概ね、良好な効果を期待できることが示唆された。一方で、下記の課題もある。

- ・正課外の活動を正課授業にどのように位置づけるか（活動の内容や数、日程など）
- ・正課外の活動に対し、事前準備や事後の報告など、教員がどこまで介入するか
- ・正課外の活動の時間や内容には差があるため、評価や加点をどのようにするか

今後、以上のことを検討しながら、正課外の活動による教育効果を期待し、「スポーツ・健康」の分野を更に広く展開していく予定である。